主を前に置く

「詩篇」16章1節から11節までを朗読。

8節「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」。

聖書を読みますと、いろいろな人物が登場してまいります。聖書に語られている人物は、全て神様に対してどういう生き方、どういうことを選び、決断してきたかを表す一つのモデルでもあると思います。神様を信じて信仰の道を歩み抜いた人もいますし、また徹底して神様に背いた人もいます。そういうそれぞれの人物の生き様が、聖書の様々な所で語られています。聖書を読む時、一つひとつ、自分のモデルとして、自分はどのタイプなんだろうかと？「いま私はアブラハムのような信仰に立った」とか、あるいは「アハブ王様のように、偶像の神を拝んでいる自分かな」とか、そこにはいろいろな人物が登場してきます。そしてそれぞれに神様は報いておられる。また、その道を決めておられ、その結末も見ることができます。それは今も変わらないことです。アブラハムのように歩むなら、アブラハムが受けたような祝福と恵みを頂くでしょう。またモーセのように歩むなら、モーセのなした業のように驚くべきことを神様は示してくださるでしょう。あるいは、ヨセフのように生きるならばそのように神様は捕らえてくださる。確かに彼らが生きた時代は、今の日本とは違います。気候風土も違う、環境も違う所で生活した人たちでもあります。しかし、そこに生きた人々、人間は変わりません。今の私たちと何千年前の彼らと、どこにも違いがない。ですから、聖書をお読みになる時、「自分は誰をモデルにしたいのか？」 是非それに倣う者となってください。いちばんなってほしいのは、イエス・キリストの姿かたちを求めていただきたい。しかし、そればかりでなくて、旧約時代に生きた人々が、いかに神様に仕え、どのように具体的な歩みをしてきたか、これは私たちの良いお手本なのです。今イエス・キリストの救いにあずかって日々生きていますが、実際の生活の中で「どうしようか？」と迷うことがあり、実際の問題にぶつかった時、どうしようか、こうしようかと、いろいろなことで、不安や恐れや心配に囲まれる。そういう時に、もう一度よく聖書をひも解いて、「私と同じような悩みの中にいた人はいないだろうか？」と、同じとは言いませんが、同じような恐れや心配や不安の中で過ごした時、何をより所として、何を慰めとし、何を力としてきたかを知るには、最大の、最高の手引書です。是非そのことを心に置いて読んでいただければと思います。もちろんこれは神様のお言葉であると同時に、神様が私たちにこうあってほしいと願っていらっしゃる、様々な人の姿が語られています。

「詩篇」16篇は、表題に「ダビデのミクタムの歌」とあります。この「詩篇」には多くの歌が記されていますが、その

中に「ダビデ」という人が作った歌がたくさん入っています。彼がどんな人かということは、皆さんもよくご存じのとおりです。イスラエル王国の中興の祖、最も繁栄を誇った時代の王様であります。そもそもイスラエルは国をもたなかった人々であります。アブラハムを父祖とし、そこからの子孫たち、12 部族という部族が分かれ出てきました。そしてイスラエル民族という民、ユダヤ人という群れをなしました。彼らは自分たちの住んでいたカナンの地が飢きんに見舞われ、食べる物がなくなったため、エジプトに逃れて来ます。始めは歓迎されたわけですが、時代が過ぎて、王様が変わってくるにつれて、エジプト人にすれば、自分たちと違う民族が自分たちの国にいること、住んでいること、しかも彼らがどんどん力を増してきたため、エジプトの人々は恐れをなしました。そのために彼らを奴隷として使役する、そうやって彼らの勢力をそぎ落とそうとする。そのために彼らは苦しい過酷な奴隷生活を強いられるようになります。やがてイスラエルの人々の祈りに答えて、神様は、モーセを立てて、エジプトから救い出してくださった。神様が「あなた方に与える」と約束なさったカナンの地を目指して、荒野の旅を始めます。その間にいろいろなことがあって、何と 40 年の長きにわたってこの荒野を放浪するわけです。

そしてついにカナンの地に定着をします。しかし、誰もいないところへ入って行ったのではなくて、そこには群雄割拠する様々な部族が勢力を保っていた。そこへ入って行くのですから、並大抵ではありません。しかし神様は「あなた方に与える」という約束に従って、力のない、戦うすべも知らない、荒野を旅してきただけのイスラエルの民が次々と敵を撃破して行きます。彼らの力の源は全て神様だった。神様は、驚くことをしてそのわざを進めて、やがてカナンの地を平定し、支配する者となります。そこに自分たちの土地をもうけて国が出来たように見えますが、決して国という形にはならなかったのです。その当時は“士師”といわれる人々、神様が時時に応じて人を選んで、その人に神様の霊を注いで、イスラエルの民を指導する役割を与えられました。それは祭司でもあり、また政治家といいますか、指導者という身分でもあったようです。ギデオンであるとか、サムソンであるとか、そういう人が選ばれ、その時に応じて、問題解決に神様は用いなさるわけです。イスラエルの民は神様を中心にした民族の連合体といいますか、緩やかな民族同士のつながり、一つのグループが出来てはいったのですが、しかし、その周囲の国々は、力強い王様がいて、そして王様の命令のもと、全てのものが動く軍隊があり、また堅固な町が造られて、そして勢力を伸ばしていこうとする国々があるのです。イスラエルにはそういうものがありませんでした。これは神様が、直接イスラエルの民の王となり、またイスラエルの民を指導するものとなってくださったのです。いわゆる神様とイスラエルの民とが直接、もちろんそこには祭司たちの執り成しという役割があるわけですが、いずれにしてもイス

ラエルの民が直接、神様のご支配、神様の導きに従う生き方をしていました。

しかし、彼らはやはり不満です。この世にあって自分たちも国造りをしたい、王様が欲しい。その当時サムエルが祭司、士師の役割を兼ねて、イスラエルを指導していた。サムエルに彼らは、自分たちも王様が欲しいと求めました。サムエルは極めて不愉快になったのです。「何が不満なのだ」というわけです。「自分がここまで一生懸命にイスラエルの民を神様の前に導いてきたのに、今更王様なんか必要ないじゃないか」と。ところが民は「やっぱり自分たちにも王様が欲しい」と。それで神様に祈りました。その時神様は「よろしい、王様が欲しいと言うならば、その王様を立てなさい」と、「ただし王が立って国造りをする時、その王様がどんな王様であろうと、必ず民は搾取されるだろうし、あるいは軍隊にとられて戦いに強制されて出て行くことにもなる。そういうことを全て承知しているか」と。イスラエルの民は今まで国造りをしたことがない。欲しいのは王様ですから、「何でもやります。大丈夫です」と言う。その結果、神様はキシの子サウルを選んで、王様として立ててくださったのです。これがイスラエル国の最初の王様だったのです。

サウル王様も神様に選ばれたわけですから、やはり信仰の人ではありました。神様は、この青年を見込んで、彼に神の力、霊を注いで王として立ててくださったのです。その時のサウル王様は非常に謙遜であり、「自分のような者がこの大任に耐えることはできません」と神様に言っています（サムエル上 9：21）。さらに「わたしには到底この務めは務まらない。どうしましょう」と言う。神様は「大丈夫、わたしが共にいるから……」とおっしゃって、サウルは王様に就いたのです。ところが彼も王様になって多くの民から「王様！」「王様！」とはやし立てられるにつれて、心が神様よりも人に向いて行くのです。

これはサウル王様ばかりでなくて、私たちにもサウルのような性質があり、物事が順調になってくる、あるいはいろいろなことに慣れてくると、神を侮るようになる。神様はサウル王様を恵んでいろいろなことを指示なさいます。そのとき一つの課題を与えられた。アマレク人との戦いであります。このアマレクというのが天敵とでも言うのでしょうか、荒野の旅をしている時、イスラエルの民が通って行く道筋にアマレクの土地があったのです。彼らはそこを通してくれと言うのですが、アマレク人は頑固に拒みます。そしてとうとう戦いになる。モーセが手を上げればイスラエルの勝ち、手を下げればアマレクが勝った（出エジプト 17:11）。そこで勝利はします。それはしかし、遠い昔の話ですが、神様は覚えています。私たちとは違いますから、何百年たっても忘れられない。サウル王様に「アマレクびとを皆殺しにしろ」と、「一つ残らず殺せ」とおっしゃった（サムエル上 15:3）。神様は「アマレク人を滅ぼし尽くせ」とおっしゃった。彼は戦いに出ていきます。

神様はその戦いに勝利を与えてくださったのです。しかし、彼らは神様のお言葉に背いてアマレクびとの牛や羊や家畜の傷のないもの、肥えたものを取ってきた。アガグという王様も生け捕りにしてくる。ギルガルで戦勝記念会をする。戦いに勝って、大喜びで大騒ぎをする。そのとき神様は、サムエルに「早く行きなさい。サウル王はとんでもないことをしてしまった。わたしは彼を王にしたことを悔いる」とおっしゃった。びっくりしてサムエルが下ってみると、サウル王様や部下たちが「王様万歳！」と戦いに勝利した祭りをしている。祝杯をあげている。ところが、後ろのほうから羊や牛の鳴き声が聞こえてくる。だから、サムエルが「あなたはどうして神様の言うことを行わなかったのか」と、するとサウル王は「いえいえ、わたしは全部殺してきました。わたしは主の言葉を実行しました」と、「じゃ、あの牛や羊の鳴き声は何だ！」「いや、あれは神様にささげるささげ物として持って来たのであって、別に自分たちが欲しかったのではない」というような言い方をする。そればかりか「民が……」「『皆がそうしてほしい。持って帰ろう』と言うから、そうしたのだ。どこがいけないのですか。わたしは神様の言うとおりにしたのに」と。実に微妙なところです。神様は「全てのものを滅ぼし尽くせ。何も残してはいけない」とおっしゃる。ところが、彼らは……、確かにほとんどは殺したのです。ほんの少し「これは神様にささげる物だからとっておこう」と、それがどこまで真実かどうか分かりませんが、いずれにしても神様のお言葉に100％従うよりも、やはりサウル王様の心の中には、人々の意見、周囲の人々、国の人々、自分を王様に担いでくれている人たちの顔色を見る。

これは何もサウル王だけではなく、私たちにもある弱点です。聖書を読んで、祈って、神様は一つの道を教えてくださいます。心に思いを与えてくださる、願いを起こさせてくださる。しかし、そうすると、あの人に当たるし、この人に嫌な顔をされるだろうし、この人からまた何か言われるかもしれん。つい人を見、様々な状況を考えて、「これも神様の御心と思うけれども、いや、ちょっと早いに違いない」。勝手にやめてしまって、別の道をたどってしまう。そうすると大失敗をする。とうとうサウル王様も神様から捨てられてしまいます。神様はご自分の言葉に従わない者に忍耐しておられた。それまでも従わなかったのはそれ一回だけではないのです。サウル王様はその前にも神様の前にしてはならないことをしてしまうのです。祭司がすべきことを自分が取って代わってやってしまう。そのときも人を見ていたのです（サムエル上13：9）。周囲の人々の反応ばかりを気にした。神様はやむにやまれず「あなたを捨てた」とおっしゃった。そう言われた時、サウル王は初めて気が付いたのです。「自分が悪かった」。それで一生懸命に祭司サムエルにしがみついて、「何とか執り成してくれ」と、袖を引っ張ったら、祭司サムエルの袖が切れたのです。それで神様は「このようにあなたを捨てた」と言われた（サムエル上 15：28）。それっきりで

す、それからのサウルは悪霊にとりつかれ、あしき思いが絶えず心を騒がせる、力を失っていく。神様の霊が取り去られて、いろいろなことに疑心暗鬼、恐れを抱きます。そして人を疑います。どんなに良いことをする人にも「何か裏がある」と絶えず疑いの目を持ちますから、心が休まらない。悪夢に悩まされます。妄想に捕われる。

わたしたちにもそういう時があります。自分の思いや感情に心が捕われてしまうと、いろいろなあらぬことを考えます。「あの人はあんなことを言ったけれどもそうじゃない。こうに違いない」「この人はまたこうするかもしれない。私はその時どうすればいい？」「こうしてやろう、ああしてやろう」と、そのことばかりにどんどん心がのめり込んでいき、ありもしない、まだなってもいない出来事を、まるでもう起こってきたかのようにパニックになる。過呼吸を起こす、息ができなくなる、苦しくなる。気付いてみると自分独りで座っている部屋の中で妄想にふけっているのです。悪の霊がその心を悩ます。仕様のないこと、ちょっとしたことによって、神様の臨在から離れるのです。神様に対する思いが乏しくなってくる。人の心に様々な肉の思いが激しく責めてきます。ぜひ、そのことに気付いていただきたい。ところが、常にサタンは「あんたは良いことをした。ここまで頑張った。それなのにあんたはこんな目に遭って」と、自己憐憫（れんびん）に沈めてくる。そうなると自分では手が付かなくなります。そしてついにガチャンと大きな衝突をする、あるいは事件や事態に出会って、ハッと気が付いたら、自分でない自分だったことに気付く。私たちの中にそういうものが潜んでいる。どうぞ、そのことをよくよく警戒していただきたい。だから聖書を読んでいると、自分と全く同じ人物がいくらでもいますから、細かく読んでみてください。「今の私は、この人だな。この人はどうなったかな？ ああ死んじゃったわ」と、そうならないとも限りません。

サウル王様はそうやって神様から離れて、ついにペリシテ人との戦いが起こった時、どのように作戦を取ればいいのか、分からなくなった。それまでは神様に従って、神様の言葉で勝利してきたのですが、神様を信じる心が消えてしまった。何をしたか？とうとう口寄せ、いわゆる占いです。死んだ者の霊を呼び出す者のところへ行くのです。とんでもないことです。占いは神様が最も嫌われることの一つです。彼はそこへ行って、もちろんまだ王様の位にいたわけです。王様と気づかれないように変装しました。そして、巫女（みこ）さんの所へ行くのです。そして巫女さんが「誰を呼び出せばいいのか？」「死んだ祭司サムエルを呼んでください」。それでどうしたか分かりませんが、そうやって死者を呼び出したのです。

篠栗のほうにもそういう人がいまして、私の所にも「良い話がありますよ」と言って来た方がいます。「死んだ人の声を聞きたいですか？」そんなものを聞きたくない。日本でも各地にそういうものがあ

ります。どこの民族にも似たようなことがいくらでもあるのです。そういうのにだまされる。

サウル王様はそのペリシテ人との戦いで死んでしまいます。ところが、神様は彼の跡を継ぐ者としてこのダビデを選んでくださった。まだその時サウル王様が王の位にいますから、祭司サムエルも怖いのです。ひそかに次なる王様を任命しなければならない。知られたらとんでもない事になります。まだ正式な王様がいるのに、次なる王様を任命しなければならないのですから……。彼は神様の言われるとおりにエッサイの家に出掛けて行き、8 人目の子どもであるダビデを選びます。彼は大変信仰深い、神様を畏れる人物でした。やがてサウル王様が死んだ時、王様の位に就きます。しかし、彼はどんな境遇、状況の中に置かれても、神様を大事にする。神様の前に自分を整え、正していく、これがダビデの真骨頂です。ダビデにこれがなかったら、ただの羊飼いです。しかし、彼は神様を最も大切なものとしました。

「詩篇」16 篇 1 節以下に「**神よ、わたしをお守りください。わたしはあなたに寄り頼みます。2 わたしは主に言う、『あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸はない』と**」。ダビデは王様になりました。それでも彼は「わたしをお守りください。わたしはあなたに寄り頼みます」と。王様になれば、自分を守ってくれる者、近衛（このえ）隊であるとか親衛隊であるとか、命懸けで自分を守ってくれる者、国を守る軍隊、できるだけ強い軍隊を持つことは王様にとって安全安心な道であります。ところが彼はここに歌ったように「神よ、わたしをお守りください」、人を頼んだのではなくて、この時も、神様に守っていただかなければ自分はどうにもならないことを知っています。また「わたしはあなたに寄り頼みます」。王様を守ろうとする人々がこれを聞いたら、がっかりするかもしれないですね。王様が「おい、お前たち、何とか俺を守ってくれ。お前たちがいればこそ俺は王なんだから」と言われると「よし、みんなで担いでやろう」という話になるでしょうが、ダビデは人を求めたのではない。神様を求めるのです。ですから、彼はどんな時にも神様の前に絶えず自分を置いていく。これが祝福の源です。ですから 2 節に「**わたしは主に言う、『あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸はない』と**」と。何が幸いか、あなたが私と共にいてくださる、神様をわたしのものとすることができる。これがダビデにとって最高の幸せなのです。

私たちはどうでしょうか？何が幸せでしょうか？ 神様？「神様が私にとって一番の幸せ、あとは何にも要らない」。そこまで神様に信頼する、神様にぶつかって行く者でありたいと思います。その先 5 節に「**主はわたしの嗣業、またわたしの杯（さかずき）にうくべきもの。あなたはわたしの分け前を守られる**」。「嗣業」というのは受け継ぐ資産、私の全て、持てる物の全てだということです。「またわたしの杯にうくべきもの」、大切なもの、杯と

いうのは、小さいものです。お酒を飲むときに使う杯ですが、その一杯というのは好きな人にとって貴重であります。だから「杯（さかずき）にうくべきもの。あなたはわたしの分け前を守られる」。神様が、わたしにとって必要なもの全てを備えてくださる。そのような神様を自分のものとすることができる。

6節に「**測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。まことにわたしは良い嗣業を得た**」とあります。「測りなわ」というのは、土地を測るときに使うもの、といっても、羊を飼う彼らは、ちっぽけな土地では駄目です。広い原っぱが必要です。そういう土地を測るのに長いひもを使ったに違いない。そればかりか、あの峰からこの峰までというような切り方をしたに違いありません。だから「測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた」、いちばん良い所がわたしの場所になった。羊を飼うとき、一匹二匹を飼うわけではありません。何千頭という沢山の羊を飼います。彼らを養うには、牧草地が必要でしょう。一箇所だけだったらそれを食べつくしたら困りますから、広い土地を順番に移動しながら養います。その牧草地が広々とある所、しかも南側の日当たりがよく、牧草が生える所、そして水飲み場がある場所、そのように羊を飼う恵まれた場所は、沢山あるわけではない。どの羊飼いたちも是非そういう場所を手に入れたいと思うでしょう。それをたとえてダビデは「**わたしのために好ましい所に落ちた**」と。「何が？」、神様をわたしの嗣業とした。「主はわたしの嗣業」、わたしは最高の地を受け継ぐことができた。「まことにわたしは良い嗣業を得た」。「この神様を信頼し、信仰が与えられたこと、これが何よりもまして私の最大の遺産、宝です」とダビデは告白した。

多くの人の中から、滅ぶべき者が、神様の憐れみを受け、主イエス・キリストを信じる者と変えてくださった。今はこのように、はばかることなく、妨げられることなく、神様を「アバ父よ」「天のお父様」と呼ぶことができる神の子としていただいた。「**子である以上、また神による相続人である**」（ガラテヤ 4:7）とあります。私たちは神様の御国を受け継ぐ者として選び召された。これはこの世のどんな財産を受け継ぐよりも、どんな宝を得るよりも、ここにありますように、「まことにわたしは良い嗣業を得た」と言うほかない。

8節に「わたしは常に主をわたしの前に置く」と。いつもわたしは神様を前にして、御前に自分がいることを選ぶ。私たちの心の中心にいつも神様を思う思いが絶えないこと、これです。ところが、そうありたいと願いつつも、見える物に捕われます。あるいは聞くおとずれだとか、自分がいま受けている悩みや問題、心配なことがドカッと心の中心に立っています。そして神様を心の隅っこに追いやって、どうしようか、ああしようかと悩み、目の前の問題ばかりしっかり握っている。それでは私たちにいのちがありません。ただ恐れと不安と心配、思い煩いだけが

心を取り囲んで、楽しかるべき日々が暗黒の日々に変わってしまう。そうならない道は何か？「常に主を前に置く」。神様を絶えず前にして行く。いろいろな問題や事柄の中に置かれた時にも、常に主を思い、主にすがる。

ダビデは度々そういう事態に遭います。彼がまだ王様にならない時でも、彼が次なる王に任命されたことをサウル王様が知り、何とか彼をひっ捕えて殺してやろうと思った。執ように追いかけた。ダビデが逃げて、荒野の野にいた時、ケイラの村がペリシテ人に襲われて、作物を取られようとした。「自分たちを助けてくれ」と伝えてきます。ダビデはそこでどうしたか？「それじゃ、俺が行ってやろう」とすぐ行ったのではない。そこでまず主に問うた（サムエル上 23：2)。神様に祈るのです。これが主を前に置く生活です。何か事があるなら、事があってもなくてもですが、まず神様に呼び求める。主がおられる。いまこのことを、神様が導いておられると認めること、これが主を前に置くことです。ダビデはまさに文字どおりその道を歩みました。ケイラの村の人たちが困っている。「助けるのは当然だ。行こう、行こう！」と飛び出したのではなく、そこで一旦、「このペリシテ人を撃つべきでしょうか」と神様に問うた。神様は「行け」とおっしゃったのです。ところが、その時ダビデと命を共にしてくれる仲間、部下がいた。彼らが、「俺たちも命からがら逃げているのに、どうして人助けができるか、やめとけ、やめとけ」と言った。確かに考えたらそうです。人助けをするような余裕はありません。自分たちも狙われて、今にも捕らえられるかもしれない。助言する人は自分と命を共にしてくれる仲間です。彼らがダビデのことを思って、「行かないほうが良い」と言ってくれるならば……。そう言われてご覧なさい、どうしますか？「お前たちがそう言うなら、ここは一つ目をつぶろう。行かないでおこう」と、そうなりやすい。ところが、その時ダビデはどうしたか？「いや、俺は行く」と言ったのでもない。もう一度主に問うた。そこで「神様、この者たちがこう言いますが、わたしは行くべきでしょうか？ 」。それに対して神様は「行け」とおっしゃった。そこで勝利を与えてくださる。それは彼が常に主を前に置いていたからです。

その後やはり同じユダの野を逃げている時、たまたまほら穴で休憩していました。そこへ追いかけて来たサウル王様の一行が来る。同じほら穴の奥のほうにダビデたちが隠れる。手前の入り口の所にサウル王様の一行が休憩をとって昼寝をする。それを見た部下たちが、「これは神様が与えてくださった千載一遇のチャンス、今ここで寝ているサウル王様を一突きすれば、もう逃げる必要はなくなる。やりましょう」と言う。ところがダビデは躊躇（ちゅうちょ）するのです。「それは駄目。神様はサウロを捨てたと言うが、しかし、なお神様が王として立ておられる方を自分が引き下ろすなんてことは到底できない。それは神様をないがしろにすること」、そう言ってサウル王様の上着のすそを切って出て行くのです。ところ

が、「**しかし、後になってダビデはサウルの上着のすそを切ったことに、心の責めを感じた**」(サムエル上 24:5) とあります。ダビデという人は、どれほど神様の前に忠実に、心一つに従って行こうとしていたかがよく分かります。王様の着物のすそを切ったとて、殺すつもりはなかったのです。しかし、自分の心のどこか、ほんの僅かでも「こいつがいなければ……」と思ったに違いない。そのままスーッと出て行ったのですが、彼は「本当に申し訳ないことをした」と思っている。

ダビデの生涯を見て行きますと、繰り返しそういうことが語られています。王様になってからもそうです。王様になってもまだサウル王様の勢力が残っている。そこにダビデが王様に立てられたとなると、やはり一筋縄ではいかない。政権交代は、国が揺れる時です。ペリシテ人はここぞとばかりに攻めてくる。やっとダビデが王の位に就いた。しかし、まだ国中を全部自分で掌握していない。まだ不満を持った連中が沢山いる中で、戦いに出なければならない。ペリシテ人が百万の大軍と戦車をもってレパイムの谷を埋め尽くして来る。それを見た時ダビデは祈りました。「主よ、このためにどうしましょうか？ 戦いに行くべきでしょうか」（サムエル下 5：19）と祈る。彼は王様になったのだから、国を守るために行くのが当たり前と思いやすいのですが、まず彼は「そもそも私がこの戦いに行くべきでしょうか？」行かなかったら負けて、国を取られるかもしれない、潰されるかもしれない。でも国を建てたのは神様、それを潰されるのも神様、だったら神様は何をなそうとしていらっしゃるのでしょうか？ 「わたしはこの戦いに行くべきでしょうか？」と聞いています。すると神様は「行きなさい」。僅かばかりの軍隊をもって行った時、神様は、驚くべきことをして、敵を追い散らしてしまう。これで国は少し安泰になったと思いきや、またしばらくすると同じようにペリシテ人が攻めてきます。場所も同じです。そうなると、前例主義といいますか、過去にこういう経験をしていますから、「またやってやろう」という話になります。しかし、彼はそうはしない。そこでもう一度、神様に祈ったのです。「この大軍に当たるべきでしょうか？ 出て行くべきでしょうか？」。その時神様は前回と違った作戦を与えました。「正面から戦ってはならない。あなた方は彼らの後ろに回りなさい。そしてバルサムの林の中に身を隠しなさい。やがてバルサムの木の上に行進の音が聞こえたなら、歓声を上げて戦いに出よ」。これは神様の作戦です。神様の言われたとおりに彼らはしました。ついにそこでもまた勝利をするのです。

神様を第一にして行く生涯が、実は私たちの最高の生涯です。私たちもダビデのようになりたいと思います。「詩篇」16篇 8 節にありますように、「**わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない**」。いろいろな問題や事の中にある時、そこでまず神様を信じ、「今このことも神様が『**事を行うエホバ事をなしてこれを成就（とぐる）**』」とおっしゃる（エレ

ミヤ 33：2 文語訳)。「**わが手より救ひいだし得るものなし、われ行はば誰かとどむることを得んや**」(イザヤ 43：13 文語訳)。この年頭から与えられていますように「**わたしは神である、今より後もわたしは主である**」(イザヤ 43：13)。今、主なる御方がこのことを、この問題の中に私を入れてくださった。「ここであなたは私をどのように取り扱ってくださるのでしょうか？」と、へりくだって、謙遜になって、神様の前に出て行きたい。神様を前に置く者となりたい。そうすると、私たちの心は定まります。何があっても、神様にはできないことはない。神様は人知を越えた、私たちの想像のつかない、考えも及ばないような事態や事柄をもって答えてくださる。

この御方を絶えず前に置く。ですから、パウロは「**ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい**」とおっしゃる（テモテ第二 2:8)。「いつも思う」、それが「主を前に置く」ことです。どんなことがあっても、この主を心に覚えて、「今、このことも神様、あなたに何かご計画があって、思いがあって起こしていらっしゃることです。ですから、神様、どうぞ、あなたの思いを、御心を教え、示してください」。絶えず主を求めて行きたい。「箴言」にあるように「**心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない**」とおっしゃる（3:5)。「**すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる**」(3：6)。「すべての道で主を認めよ」と。

ダビデもまさにそうです。そのことを文字通り実行した人です。もちろん失敗したこともありますが、その中でも主を第一にし、主に立ち返って行きました。どうぞ、この年も私たちは、このダビデ、第二の、第三のダビデになりたい。是非主の祝福と恵みを頂きたいと思うのです。8 節に「**わたしは常に主をわたしの前に置く**」と。いつも自分にこのことを言い聞かせてください。「わたしは常に主をわたしの前に置く」。何かいろいろな思いが心に満ちて騒ぐ時、自分が映っている鏡に向かって、「わたしは常に主をわたしの前に置く」と。そう言うと、心がガラッと変わります。「そうでした。私は神様をどこかに置き忘れて来た。これは間違っていた」と、軌道修正をしてくださる。常に主をわたしの前に置いて、「**あなたはわたしの主、あなたのほかに幸いはない**」。本当に神様を喜び、これを幸いの源として行きたいと思います。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。